ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

交響曲 第25番 ト短調 KV183
Symphony No.25 in G minor, KV183

1 オープニング
Opening

2 第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ [08:05]
Ⅰ.Allegro con brio

3 第2楽章 アンダンテ [06:19]
Ⅱ.Andante

4 第3楽章 メヌエット [03:57]
Ⅲ.Menuetto

5 第4楽章 アレグロ [05:43]
Ⅳ.Allegro

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 Wiener Philharmoniker
指揮: レナード・バーンスタイン Conducted by Leonard Bernstein
監督: ハンフリー・バートン Directed by Humphrey Burton
収録: 1988年 ウィーン、ムジークフェラインザール Musikvereinssaal Wien 1988

●モーツァルトの17歳の交響曲にバーンスタインの最晩年の演奏様式を聴く
山田 治生

このモーツァルトの交響曲第25番の映像は、バーンスタインが亡くなる2年前の1988年10月にウィーン楽友協会で収録されたものである。今回、同時発売された交響曲第39番やピアノ協奏曲第17番の映像（ともに1981年収録）と比べると、その7年の間に、バーンスタインが容姿においても音楽的内容においても随分年をとったように感じられる。

バーンスタインは、80年代前半にウィーン・フィルとブラームスの交響曲全集や協奏曲集を録音した後、80年代半ばからは同フィルとシューマン、ハイドン、モーツァルトに取り組み、その後、シベリウスやマーラーを取り上げた。マーラーについては、ウィーン・フィル以外にコンセルトヘボウ管やニューヨーク・フィルとも録音をすすめた。そのほか80年代後半には、ニューヨーク・フィルと、アイヴスやコープランドなどのアメリカ音楽、そしてチャイコフスキーの後期三大交響曲も録音した。

バーンスタインがウィーン・フィルとのモーツァルト・シリーズを開始したのは81年の交響曲第39番であり、85年の交響曲第38番《プラハ》で後期6大交響曲を録り終え、それ以降も、87年に交響曲第29番を、88年に第25番を録音している。特に第25番と第29番は、ニューヨーク・フィル音楽監督時代には演奏会でさえも一度も指揮したことのなかったレパートリーであり、ウィーン・フィルとが初録音であった。70歳になろうとしていたバーンスタインがどうしてモー

ツァルトの10代の交響曲を敢えて取り上げようとしたのであろうか。しかも、80年代後半は、小編成の古楽器オーケストラによる演奏が盛んとなり、既成のオーケストラがモーツァルトの若い頃の作品を手掛けにくい状況になりつつあった。

ここに聴くバーンスタインの演奏は、そういう古楽興隆の時流とは無縁のものだ。また、17歳のモーツァルトの青春の息吹を感じさせるものでもない。70歳のバーンスタインがモーツァルトの残した楽譜を自分なりに解釈し、指揮したものだといえるだろう。モーツァルトの若い頃の交響曲でさえ、バーンスタインはあくまで自分のやり方を貫く。その遅めのテンポと情感あふれる表現は、まさに「晩年のバーンスタイン様式」と呼べるものだ（同じ頃に録音されたウィーン・フィルとのシベリウスの交響曲やニューヨーク・フィルとのチャイコフスキーの《悲愴》などと通じるものがある）。

第1楽章からバーンスタインは、シンコペーションの一音一音をしっかりと弾かせる。29小節目からのフォルテも激しく強烈だ。最後のコーダ（201小節目から）で一旦ピアノに落としてから劇的なクレッシェンドをする方法はロマン主義的な解釈といえるだろう。晩年のバーンスタインらしい重々しさは、第3楽章と第4楽章で顕著だ。第3楽章は、1小節や2小節ごとのフレーズでとらえられることが多いが、バーンスタインの演奏では、1拍1拍に重みがある。第4楽章はリズム感が希薄になったデモーニッシュな弱音で開始される。バーンスタインがこの楽章で展開する悲劇は、モーツァルトの青年期のものというよりは彼の晩年期のもの（《ドン・ジョヴァンニ》や「レクイエム」）に近いように感じられる。バーンスタインは、交響曲第25番にモーツァルトの晩年に通じるものを見出し、わざとそれを強調しようとしたのかもしれない。逆説的ではあるが、このモーツァルトの17歳の交響曲の演奏は、マーラーやブラームスの交響曲の演奏以上に、晩年のバーンスタインの重くて濃厚な演奏様式を際立たせているといえるだろう。

●モーツァルト：交響曲第25番 ト短調 K.183

現存するモーツァルトの交響曲のなかで、「短調」で書かれたものは、第25番K.183と第40番K.550の2曲しかない。これらはともに「ト短調」で書かれているため、有名な第40番に対して、第25番は「小ト短調」と呼ばれることがある。

交響曲第25番が作曲されたのは1773年。17歳のときの作品だ。青年モーツァルトがこのときなぜ短調の交響曲を書いたのかはわかっていないが、激しい感情表出が特徴となっている交響曲第25番は、ドイツのロマン主義を先取りする「シュトルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）」と呼ばれる当時の時代精神を反映したものだと言われている。

楽器編成では、ホルンが4本用いられることが特筆される。またファゴットがバスのパートから独立した働きをするのも特徴的だ。

第1楽章:アレグロ・コン・ブリオ。シンコペーションのリズムが印象的な激しい第1主題で始まる。第2主題は長調に転じた愛らしいもの。

第2楽章:アンダンテ。緊張度の高い第1楽章とは対照的な穏やかで優雅な音楽。弱音器をつけたヴァイオリンと2本のファゴットが対話する。第2主題は第1ヴァイオリンが軽やかに奏でる。

第3楽章:メヌエット。宮廷の優雅さからは遠い、厳しいト短調のメヌエットである。トリオ（中間部）は、ト長調に転じ、管楽器だけの明るい音楽となる。

第4楽章:アレグロ。第1主題は第3楽章のメヌエット主題と類似している。そしてしばらくするとヴァイオリンに第1楽章でも用いられたシンコペーションのリズムが現われる。他楽章の要素を取り入れることによって、作品全体の統一がはかられているのである。付点のリズムによる第2主題は第1ヴァイオリンが提示する。

●レナード・バーンスタイン

指揮者としてだけでなく、作曲家、ピアニスト、教育者、著述家、平和運動家として活躍した「音楽家」。1918年8月25日、米国マサチューセッツ州ローレンスに生まれた。10歳のときに伯母からピアノを譲り受け、音楽の才能を開花させる。ハーヴァード大学時代にミトロプーロスから強い影響を受け、カーティス音楽院でライナーに指揮を師事。40年にはタングルウッドでクーセヴィツキーに学ぶ。

43年8月、ニューヨーク・フィルの副指揮者となり、同年10月に急病のワルターの代役でニューヨーク・フィルにデビュー。センセーショナルな成功を収めた。44年には、ピッツバーグ響で自作の交響曲第1番《エレミア》を初演。45年から48年まではニューヨーク・シティ響の音楽監督を務める。53年にスカラ座デビュー。57年には作曲を担当したミュージカル《ウエスト・サイド・ストーリー》が大ヒットした。

57年、ニューヨーク・フィルの首席指揮者となり、58年から69年まで同フィルの音楽監督を務めた。その間、マーラーの交響曲全集の録音を進める。また、指揮、司会、台本執筆を担当した「ヤング・ピープルズ・コンサート」が大人気を博した。

66年に《ファルスタッフ》を指揮してウィーン国立歌劇場にデビュー。69年にニューヨーク・フィルの音楽監督を退任してからは、フリーの指揮者として、

ウィーン・フィル、イスラエル・フィル、コンセルトヘボウ管、ニューヨーク・フィル、バイエルン放送響、サンタチェチーリア国立アカデミー管、などに客演。79年にはベルリン・フィルを指揮。 作曲家としては、《オン・ザ・タウン》や《キャンディード》などのミュージカル、3つの交響曲のほか、「ミサ曲」やオペラ《静かな場所》などの大作を残す。

教育活動にも熱心に取り組み、タングルウッド音楽祭やシュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭で後進の指導にあたるほか、90年夏には札幌でPMFを創始した。

1990年10月14日、ニューヨークの自宅で永眠。